

天声人語

「星の王子さま」のサンテグジュペリが言ったそうさ。へ完璧が達せられるのは、付け加えるものが何もなくなった時ではなく、削るものが何もなくなった時である。『名言の森』と

いう本から引いたが、芸術論としても人生論としても深みがある▼通じるものがあるろう、亡くなった詩人の長田弘ながたひろしさんはこう書いていた。へ一人の日々を深くするものがあるなら、それは、どれだけ少ない言葉でやってゆけるかで、どれだけ多くの言葉ではない。詩でも散文でも簡潔な美しさは際だっていた▼秘密を
ご本人が「言葉のダシのと리카た」と題する詩に残している。へかつおぶじじゃない／まず言葉をえらぶ／……はじめに言葉の表面の／カビをたわしでさっぱりと落とす▼そしてへ血合いの黒い部分から／言葉を正しく削ってゆく／言葉が透きとおってくるまで削る。そのあと鍋を火にかけ、言葉の意味を沈めて、沸騰寸前にサツと掬い取り、黙って漉しとる——▼そうやって抽出された詩と文には、はっとする一行がいつも静かにたたずんでいた。たとえば、へ立ちどまらなければ／ゆけない場所がある。ぜい肉をそぎ切った言葉の数々は、冗舌と喧噪にまみれた心身に、滋味となって染みしてきたものだ▼長田さんの詩句を、小欄も何度かお借りした。震災の痛手が癒えぬ故郷、福島を案じながらの旅立ちではなかったか。享年75。日常というものを生みだす時間と場所を、生涯をかけて慈しんだ人が、静かにペンを置いた。